

The Revolt of Islam の詩形について

太田 直也

On the Poetic Form of *The Revolt of Islam*

Naoya Ohta

言うまでもなく、詩におけるフォームは作品そのものから独立して存在するものではなく、単独では重要な意味を持つものでもない。とは言うものの、ある思想、あるいは経験を伝達・表現しようとする一篇の詩を解すにあたっては、詩形は重要性を帯びてくる。詩形は言葉の「器」でありながら、それに留まらず、表現上の一つの要素となるからである。この点からすると、読者が詩として受容する「文字列」を創り出すあらゆる詩人は詩形にしかるべき注意を払っているはずである。

イギリス・ロマン派の詩人達の詩は、直感によって書かれた自然発生的なものと捉えられがちである。しかし、例えば S. T. Coleridge の作品群に目を向ければ、必ずしもそうとは言いきれないということがわかるだろう。彼は *The Rime of the Ancient Mariner* をバラッド格調を用いて書き、音やイメージの点で非常に高い効果を挙げている。さらに *Christabel* においては——彼自身その序文で述べているように——その格調に変化を加えて、独特なリズムを創り出し、この詩において彼が意図したものを表現するのにふさわしい雰囲気醸し出すことに心を砕いているのである。¹⁾ この意味では、Coleridge の詩も十分に技巧的であると言えるだろう。

Coleridge と同様に哲学的色彩の強い作品を著した Percy Bysshe Shelley にとっても、詩形が極めて重要であったことは言うまでもないだろう。事実、彼は *Prometheus Unbound* 一篇からさえもわかるように、非常に多様な詩形を用いており、詩形に対しては相当な拘りを持っていたことを明らかにしている。例えば Behrendt などは次のように述べている。

Shelley does not “use up” particular poetic form as Milton did, ... Rather, his work is characterized by a continual movement from one form to another in an attempt to discover the particular advantages of each. ²⁾

では、Spenser 以来のスペンサー連の名手³⁾ とされる Shelley の作品においてスペンサー

連という詩形はどのような目的を持って採用され、どのような効果をもたらしているのでしょうか。本稿においては特に *The Revolt of Islam* に焦点が当てられることになるが、この詩では詩形が音韻等の問題のみならず、その他の事項のために一層作品の内容と密接な関係を持っているように思われる。以下それについて少し見てゆくこととしたい。特に *Queen Mab* から *The Revolt of Islam* への間の Shelley の思想の変化との関係については注目したい。

I

まず伝記的側面を踏まえて見てゆきたい。Shelley が真剣に Spenser を読み始めたのは多読家の彼にしてはやや遅く 1813 年、21 歳の頃からのようが、⁴⁾ 後の彼の作品を考えてみるとその読書から受けた衝撃、影響はかなり大きなものであったことがわかる。彼はスペンサー連を用いて数篇の詩を著しているが、中でも有名（かつ優れた）ものは *Adonais* であり、それに比べれば *The Revolt of Islam* はむしろそれに先立つ習作に過ぎないようにさえ思われる。⁵⁾ とは言え、いくら詩才豊かな Shelley といえどもスペンサー連はその押韻形式などからして、詩作するに際しては決して容易なものとは考えられない。確かにスペンサー連の織りなす豊潤な響きには魅力があり、それがこの形式の採用理由と考えることはできる（ちょうど Shelley がしばしば三韻句法をその律動性の豊かさゆえに用いたように）。それにしても、この難しい詩形を使ったことにはやはり疑問が残るのである。Shelley 自身はこの辺の事情を以下のように述べている。

I have adopted the stanza of Spenser (a measure inexpressibly beautiful), not because I consider it a finer model of poetical harmony than the blank verse of Shakespeare and Milton, but because in the latter there is no shelter for mediocrity; for you must either succeed or fail. This perhaps an aspiring spirit should desire. But I was enticed also by the brilliancy and magnificence of sound which a mind that has been nourished upon musical thoughts can produce by a just and harmonious arrangement of the pauses of this measure.⁶⁾

ここで我々が注目したいのは、Shelley がスペンサー連の持つ音の美しさを述べる一方で、blank・ヴァースよりも凡庸さが入り込む余地を残しているとしている点である。Shelley の作品群を執筆順に見る時、*The Revolt of Islam* 以前の長編詩 *Queen Mab* と *Alastor* はどちらも blank・ヴァースで書かれていることがわかる。*Queen Mab* と *The Revolt of Islam* とが、大きく見て人類愛と社会の改革という同一のテーマを有していること、さらに後に Shelley 自身が *Queen Mab* を失敗作として認めていることからすると、彼にとって

極めて重要なテーマを詩作品としてより良いものにしたかったがために、ブランク・ヴァースを捨て、スペンサー連を選んだということが言えるだろう。*Queen Mab* と *The Revolt of Islam* の内容に関しては後で再び考察を加えることとして、さらに伝記的な部分を見てみよう。

The Revolt of Islam の序文中、Shelley は自らがこの作品により名声を手に入れるということはまったく念頭にないとし、以下のように記している。

The Poem which I now present to the world is an attempt which I scarcely dare to expect success, and in which a writer of established fame might fail without disgrace.⁷⁾

ここで Shelleyの心に浮かんだのは Byronではなかなただろうか。その理由として、この作品が執筆されていた当時 Byronが既に詩人として名声を確立しており、まだ完結していなかった *Childe Harold's Pilgrimage* がやはりスペンサー連で書かれていたことが挙げられる。さらに、Byron に対する卑屈なまでに謙虚な Shelleyの態度を思い出すとき、我々はこの“a writer of established fame”が——もちろん狭い見方ではあるが——Byron を指していると思わずにいられないのである。つまり、Shelley は自らの *The Revolt of Islam* が同じ詩形で書かれた *Childe Harold's Pilgrimage* よりも劣ると、いつもの Byron に対する態度と同じく述べていると考えられるのである。

しかし *The Revolt of Islam* の序文の後半部では、Shelley は自分がこの詩を創造するにあたっていかに精力的にペンを奮ったかを、多少の自信を持って述べているのである。

I have exercised a watchful and earnest criticism on my work as it grew under my hands. I would willingly have sent it forth to the world with that perfection which long labour and revision is said to bestow.⁸⁾

多少意地の悪い見方ということになるだろうが、我々は序文前半部の謙虚な Shelley をそのまま受け入れてはいけけないのである。彼はこの詩を大作に仕上げ、自らの詩才を世に示し、詩人として認知され、名声を我がものとするという野望を抱いていたと言って良いだろう。序文における過度なまでの読者に対する意識はこれを裏付けるものとならないだろうか。いずれにしても、序文から言えることは、スペンサー連の使用の理由の一つが、自らの野望達成のための「言葉の器」として既に認知されている Byron に倣う、というものであったということである。ただし *Childe Harold's Pilgrimage* が優れた作品であるということをお我々は忘れてはならないのであり、その意味での模倣の部分も当然あったであろうということも記しておきたい Byronに関わる事柄はこの他にもあるが、後述することとする。

II

既に述べたが、*The Revolt of Islam* 以前の長編詩 *Queen Mab* 及び *Alastor* はいずれもブランク・ヴァースを用いて書かれており、表面的には *Alastor* を除く二つは同じテーマを持っている。しかし Curran が “...*Queen Mab* relates a finished vision. *The Revolt of Islam*, on the other hand, is concerned with how that vision is to be attained”⁹⁾ と述べているように、その中心となる点やトーンは非常に異なっている。*The Revolt of Islam* における Shelley の主張をまとめると、1) 人間相互の愛による無血革命の遂行、2) 民衆の意識の向上（教育の重要性を含む）、3) 女性の地位の向上（万人の平等）、4) 既存の社会通念や常識、因習の放棄、5) 階級間闘争の終焉の必要性、ということになるだろう。このような事柄は、声高な女性解放論などを除けば *Queen Mab* でうたわれているものと大筋においては変わらない。しかし、*Queen Mab* における Shelley は、“Spirit of Nature! all-sufficing Power, /Necessity! thou mother of the world!”¹⁰⁾ という詩行に代表されるような、「必然」に信を置く、極めて機械的な唯物論を基盤とした主張を行っている。それに対して *The Revolt of Islam* では、同じ社会改革をうたうにしても、*Alastor* と同じく、人間の心に目を向けて——従って社会変革の方法も若干異なってくるのであるが——どちらかと言えば唯心論的な主張となっているのである。その一端は *The Revolt of Islam* で展開されているゾロアスター教的世界観に見られる。つまり、彼は William Godwin を経由して学んだ d’Holbach の論から Plato 的な二元論へと自らの思想を転換しているのである。以下、その点を確認してから詩形の問題に戻ることにしたい。

The Revolt of Islam においては蛇が善、鷲が悪を象徴しているが、¹¹⁾ 次の一節はその両者の闘いを別な形で述べている箇所である。

The earliest dweller of the world, alone
 Stood on the verge of chaos. Lo! afar
 O'er the wide wild abyss two meteors shone,
 Sprung from the depth of its tempetuous jar:
 A blood-red Comet and the Morning Star
 Mingling their beams in combat —— as he stood
 All thoughts within his mind waged mutual war,
 In dreadful sympathy —— when to the flood
 That fair Star fell, he turned and shed his brother's blood.¹²⁾

この引用部で我々の注意をひくのは “he” あるいは “his” といった語であろう。これらの語は表面的には、当然ながら —— どころなく Cain を想起させるような —— “the

earliest dweller of the world”を指しているのであるが、最終行の“he”は“*That fair Star*”（つまり“*the Morning Star*”）とも取れるように思われる。ここで即座に思い出すのはAlastoの中の“*Thy [the stream's] darksome stillness, / Thy dazzling waves, thy loud and hollow gulfs, / Thy searchless fountain, and invisible course / Have each their type within me.*”¹³⁾という一節である。この、自然界——すなわち人間を取り囲む外の世界——に存在するものの類似物が人間の内的世界にあるという考え方に即して引用部を見てみると二つの星の闘いは、これを見ている人間の内部において起こっているものであるとも受け取れるのである。そして二つの星が善と悪とを象徴するものであるとすれば、この箇所は人間の心の中における善と悪をめぐる葛藤をうたっているということになるだろう。“*On the Devil and Devils*”と題する論文で、Shelleyは人間の内に存在する善と悪に言及し、マニ教に見られる観念を引き合いに出して、外界の善と悪との闘いは人間の心の中の葛藤に他ならないとしている。¹⁴⁾

さらに*Queen Mab*との関係からもう一つ描写を見ておきたい。それは*The Revolt of Islam*中の「偉人達の霊の殿堂」である。*Queen Mab*の中にも超自然的な宮殿が登場するが、その内部の描写はやや希薄である。ところが*The Revolt of Islam*はそこに相当な数の詩行が費やされている。

It was a Temple, such as a mortal hand
Has never built, nor ecstasy, nor dream
Reared in the cities of enchanted land:

.....

Like what may be conceived of this vast dome,
When from the depth which thought can seldom pierce
Genius beholds it rise, his native home,
Girt by the deserts of the Universe;
Yet, nor in painting's light, or mightier verse,
Or sculpture's marble language, can invest
That shape to mortal sense — such glooms immerse
That incommunicable sight, and rest
Upon the labouring brain and overburdened breast.¹⁵⁾

このような超自然的な建造物の内部へと導かれてゆくという描写はShelleyの作品においては——一連のゴシック小説群やColeridgeの影響もあるのだろうが——決して珍しいものではないと言えるだろう。しかし、この様な描写がこの作品では一層重要であると思われる。上に述べたように、*Queen Mab*の中の宮殿の様子と比べてみるとそれは明ら

かである。

まず“Temple”が人の手により建てられたものではないということ、さらに引用部の3行目に述べられていることから、これが現実の世界のものではないということ、あるいは少なくとも人間の眼に見えるものではないということがわかる。また引用部の“his native home”は特に注意をひくものである。この“his native home”が“Girt by the deserts of the Universe”という状況にあるということから、我々は人間の内的世界とそれを取り巻く外界との関係の密接さを述べた“On the Devil and Devils”,あるいは“Speculations on Metaphysics”を思い出すことになる。¹⁶⁾上の“Temple”の中、すなわち現実を超えた領域をあたかも現実世界であるかのように描いているが、ここでShelleyは外の世界の類型である人間の内面世界を描いているのではないだろうか。つまり、“the Universe”は人間の心という宇宙であって、“his native home”はその最深部ではないかということである。この事は、上の引用部において人の業では表現できないもの——すなわち想像力によってのみ心の中に具現化することの出来るもの——が“the labouring brain and overburdened breast”に“rest”していることにより明らかになっているように思われる。この様な、想像力をもってしても近寄ることが困難な人間の心の深部については *Alastor* でも述べられているが、ここではむしろ“Mont Blanc”の冒頭の一節を見ておきたい。

The everlasting universe of things
 Flows through the mind, and rolls its rapid waves,
 Now dark — now glittering — now reflecting gloom —
 Now lending splendour, where from secret springs
 The source of human thought its tribute brings
 Of waters, — ¹⁷⁾

この人間の思想の源泉をうたった一節と先の *The Revolt of Islam* 中の件りとの類似は極めて明瞭である。何にも増して、用語の点での両者の共通項の多さが気になる。ここでは“universe”の周辺が問題になるだろう。“Mont Blanc”の“universe”は一読して明らかのように、人間の内にあり、そこには“The source of human thought”があるとされている。それに対して *The Revolt of Islam* の方の“The Universe”には“deserts”というような語が関係しており、はたして“his native home”が人間の思想の源泉、すなわち心の最深部であるかどうか、すぐにはわからない。Ellis によれば、ここで“desert”の意味するところは“regions unshaped even in the imagination”¹⁸⁾であり、この解釈に基づくと我々の説明も極めて簡単なものとなるだろう。つまり、“Mont Blanc”における“universe”と“The source of human thought”との関係、*The Revolt of Islam* 中の“the depth which thopught can seldom pierce”という句は、“The Universe”の想像だに出来ない所がその

根源であることを示唆しているのである。ではその根源に“Girt”された“his native home”とは何かと言えば、当然その根源の、核の部分ということになるだろう。

このように、“Temple”は人間の心の内部をも意味しているのであるが、*Queen Mab* 以降 Shelleyが人間の心に興味を持ち、社会変革に際しての中心的要素としていることがわかる。

それでは、人間の内面に対する Shelleyの関心はどこからきているのであろうか。既に見たように、作品では特に *Alastor* 辺りからその関心を前面に出す傾向が強まっているように思われる。それは、例えば“On Life”などに見られるように、機械的な論で語り尽くせるほど人間やその心が単純ではないということを、Shelley が改めて悟ったからに他ならない。¹⁹⁾ また前に見たように、人間の内的世界とその人間を取り囲む外的世界とが互いに類似の関係にあるというように彼は考えている。と言うことは、社会状況というものはある程度人間の心（心理状態）の投影であるとも言えるわけであり、社会の状況が複雑であるということは、人間の心もそうであるということの意味するだろう。また同様に、社会を変革するということは、人間の精神を改革することを指すのである。従って Shelley がこの様な考え方をして、さらに社会を変革することを欲していたならば、必然的に人間の心により一層の注意を向けざるを得なかったのである。

また後年になって明言しているが、Shelley は理性を想像力よりも下位に置き、使用者に対する道具、精神に対する肉体、実体に対する陰と考えている。²⁰⁾ これは簡単に言えば、理性尊重の18世紀の時代思潮に対する反駁である。つまり、彼は18世紀的なものからの脱却を目指して人の心に眼を向けたのである。

この様な18世紀的なものに対する反対、また *Queen Mab*と関連して我々が想起するのは、Shelley が「師」であるWilliam Godwinの論に異を唱えたということである。

Queen Mab という詩はGodwinの *Political Justice* を韻文化したようなものと評されるが、²¹⁾ それほどまでにGodwinに心酔していた Shelleyが「師」を否定するに至ったのにはいくつか理由が考えられる。

一つは18世紀的なものを自らの思考から排除しようという Shelleyの姿勢である。さらにGodwinの論自体が矛盾を孕んでいたということも忘れてはならないだろう。Godwinは人間の自由意志を強調する一方で、絶対的な力を有する「必然」の存在を主張していた。しかし、もしも人間の力を超越した宇宙の力があるとすれば、自由意志とは一体何なのか。この問いに対してGodwinは明確な回答を与えてはいない。*Political Justice* の抱えるこの矛盾に Shelleyは気付いていなかっただろうか。既に述べたが、明らかに Shelleyは、人間の心が機械的な理論で割り切れるものではないことを認識している。そしてそこで必要になるのが普遍的な愛の力ということになる。つまり、人間の精神が宇宙に作用し、それを作動させる絶対的な力を持つという論によってGodwinの矛盾点を解消し、その論に修正を加えているのである。人間の心の重要性に気付いた Shelleyにとって、Godwinの唱える機械的決定論はまさに反駁の対象となるものだったのである。

また、ShelleyがGodwinを否定するに至ったには、両者の *Political Justice* の解釈の相違が考えられる。これはまず解釈の問題から始まって、最終的には二人の社会改革論の違いを明確にし、ShelleyのGodwinismからの脱却（不完全ではあるが）を決定的にしている。Shelleyの *An Address to the Irish People* をめぐる二人の書簡が明確に物語っている。1812年2月24日付けの手紙と上記のパンフレットを受け取ったGodwinは、以下のようにShelleyに返信している。

You profess the immediate object of your efforts to be “the organization of a society, whose institution shall serve as a bond to its members.” If I may be allowed to understand my book on “Political Justice,” its pervading principle is, that association is a most ill-chosen and ill-qualified made of endeavouring to promote the political happiness of mankind.²²⁾

周知のようにGodwinの論は機械的唯物論に基づいているだけではなく、個人主義に徹したものであり、決して人間の団結を認めようとしていない。それに対してShelleyは、上に挙げたパンフレットに見られるように、社会の改革の基礎に民衆の団結を置いているのであるから、当然Godwinの攻撃を受けることになる。二人の社会変革の方法は明らかにこの点で異なっているのである。上のGodwinの手紙を受け取って、時を置かずShelleyは次のように反論する。

… “Political Justice” was first published in 1793; nearly twenty years have elapsed since the general diffusion of its doctrines. What has followed? Have men ceased to fight? Have vice and misery vanished from the earth? Have the fireside communications which it recommends taken place? … I have at length proposed a Philanthropic Association, which I conceive not to be contradictory, but strictly compatible with the principles of “Political Justice.”²³⁾

*Political Justice*は版を重ねる度そこで展開される論に修正が加えられ、次第に当初の過激さを失っていった。社会の変革が一層必要となってゆく状況の中でGodwinの急進性が影を潜めてゆくこと、また最も過激な初版ですらも社会に対してその効力を一向に発揮していないことに対するShelleyの苛立ちが上の書簡に表れている。そこで彼が持ち出してきたのが民衆の同盟というものである。二人は明らかに「政治的正義」達成の方法論を異にしているのである。

以上のような見解のくい違いは、二人のフランス革命の解釈の違いとなっている。Godwinは現象の隠された本質、原因を私心のない立場で探求することを哲学者の使命とし、

私心と暴力的革命を避けるために他社との同盟を禁ずる。利己心と他社との同盟に関しては民衆に対しても認めていないGodwinは、民衆が徒党を組んだことがフランス革命の失敗の原因であるとする。一方 Shelleyは、一時的には革命が成功した原因は民衆の団結にあるとし、真に階級闘争に終止符を打つことが出来なかったのはしかるべき指導者がいなかったからであると考えている。従って Godwinismに彩られた *Queen Mab* と、フランス革命をモデルとし Neo-Godwinismとも呼ぶべきものを基礎とする *The Revolt of Islam* が全く異なるトーンを持つものであるのは当然なのである。

III

いままで考察してきた事から、伝記的部分以外にも、Shelley がスペンサー連を採用した理由があることがわかる。

まず、ブランク・ヴァースで書かれた、Godwin色が極めて強い「失敗作」の *Queen Mab* を捨て、新たな社会変革の詩を著すために新しい形式が必要であったことが挙げられる。つまりKucichが言うように、Godwinが Shelleyの眼を Spenserに向けさせた一人であったとしても、²⁴⁾ やはり革命詩としての *Queen Mab* は書き改める必要があったのであり、それに際しては Godwinismではなく Neo-Godwinismのための「器」が必要だったのである。Shelley は *The Daemon of the World* と題して *Queen Mab* を書き改めており、これはブランク・ヴァースで書かれている。しかしこの詩は *Queen Mab* からGodwin的な部分の多くを削除しただけのものであり決して新たな革命詩とはなっていない。*The Revolt of Islam* を創造するにあたっては彼は同じテーマであってもまったく新しい詩を目指しており、そのため新たな形式が必要となったのである。

また、*The Revolt of Islam* という詩が人間の心に関わることをうたい、民衆の同盟を訴えるものであるということから、より人々の心に響く美しい韻律が大切となったということも忘れてはならないだろう。人々の啓蒙という事柄を社会における詩人の使命と考える Shelleyゆえ、この点は彼にとっては当然重要であったはずである。²⁵⁾ スペンサー連という、素晴らしい響きを奏でる詩形は、彼にはこの上もなく有用な表現手段、要素の一つとなったのである。

さらに、Shelley の社会革命の方法論という点に関連しては、Byronが *Childe Harold's Pilgrimage* において愛を強調したことが挙げられる。既に見たように、Shelley は *Queen Mab* の後その社会改革論の中心に人間相互の愛を据えている。それゆえ、当時の一流の詩人 Byronがうたった愛の詩を参照してスペンサー連を用いていると考えられる。そしてそこに暴力的なものを排し、段階を踏んだ革命のためのモラルを、キリスト教的倫理観を色濃く映し出している Spenserの作品を形式的に利用することで、持込みたかったのであろう。つまり、Shelley は従来通り伝統を否定しつつ、少なくともこの作品では文学の歴史

における伝統を受け入れるのではなく、利用しているのである。

以上のように Shelleyが *The Revolt of Islam* をスペンサー連を用いて著した理由は、単にそれが物語詩である——それゆえ名作の *Faerie Queene* に倣う——ということではなかったと言うことが出来るわけである。

尚、本稿においては実際に詩作品としての *The Revolt of Islam* におけるスペンサー連の効用を韻律等を交えて考察することが出来なかった。それに関しては稿を改めることとし、不十分ながらここで本稿を閉じたいと思う。

注

- 1) Cf. Samuel Taylor Coleridge, *Christabel, The Complete Poetical Works of Samuel Taylor Coleridge* in 2 vols. ed. with textual and bibliographical notes by Earnest Hartley Coleridge (1912; rpt. London: Oxford University Press, 1965), I, 215.
- 2) Stephen C. Behrendt, *Shelley and His Audiences* (Lincoln and London: University of Nebraska Press, 1989), p. 6.
- 3) Cf. *Princeton Encyclopedia of Poetry and Poetics* Enlarged Edition ed. Alex Preminger, Frank J. Warnke and O. B. Hardison, Jr. (New Jersey: Princeton University Press, 1974), p. 807.
- 4) Cf. Greg Kucich, *Keats, Shelley, & Romantic Spenserianism* (Pennsylvania: The Pennsylvania University Press, 1991), p. 257.
- 5) この点は多くの批評家の意見の一致するところであると思われる。Cf. Desmond King-Hele, *Shelley: His Thought and Work* (1920; rpt. London: Macmillan, 1962), p. 313.
- 6) Percy Bysshe Shelley, *The Revolt of Islam, The Oxford Standard Authors edition of the Complete Poetical Works of Percy Bysshe Shelley* ed. Thomas Hutchinson (1907; rpt. London: Oxford University Press, 1975), p. 35. 尚、Shelley の詩からの引用はすべてこの版による。
- 7) *Idid.*, p. 32.
- 8) *Idid.*, p. 36.
- 9) Stuart Curran, *Shelley's Annus Mirabilis: The Maturing of an Epic Vision* (San Marino, California: Huntington Library, 1975), p. 26.
- 10) *Queen Mab*, p. 786.
- 11) 拙論、「Shelleyの書く蛇と鷲の闘いについて——*The Revolt of Islam* を中心として——」『スプラウト』第22号（東京：立正大学大学院英米文学研究会，1993年），pp. 56-66参照。
- 12) *The Revolt of Islam*, p. 46.
- 13) *Alastor*, p. 26.

- 14) Cf. Percy Bysshe Shelley, "On the Devil and Devils," *The Complete Works of Percy Bysshe Shelley* in 10 vols. ed. Roger Ingpen and Walter E. Peck (New York: Gordian Press, 1965), VII, 87. Shelley の散文, 書簡からの引用はすべてこの版により, 以下 *Works* と略して記す。また巻数はアラビア数字で示す。
- 15) *The Revolt of Islam* p. 51.
- 16) See Note 14). また "Speculations on Metaphysics" では Shelley は "It imports little to inquire whether thought be distinct from the objects of thought. The use of the words external and internal, as applied to the establishment of this distinction, has been the symbol and source of much dispute. This is merely an affair of words" としている。Cf. "Speculations on Metaphysics," *Works*, VII, 65.
- 17) "Mont Blanc," p. 532.
- 18) F. S. Ellis, *A Lexical Concordance of Poetical Works of Percy Bysshe Shelley* (London: Bernard Quaritch, 1892).
- 19) Cf. "On Life," *Works*, VI, 194.
- 20) Cf. *A Defence of Poetry*, *Works*, VII, 111.
- 21) Cf. H. N. Brailsford, *Shelley Godwin and Their Circle*, The Home University Library of Modern Knowledge, 77, 2nd ed. (1951; rpt. London: Oxford University Press, 1961), p. 126.
- 22) William Godwin. "Letter to Percy Bysshe Shelley, March 4, 1812" in Thomas Jefferson Hogg, *The Life of Percy Bysshe Shelley* in 4 vols. (London: Edward Moxon, 1858), II, pp. 83-84.
- 23) "Letter to William Godwin, March 8, 1812," *Works*, VIII, 287-88.
- 24) Cf. Kucich, pp. 258-59.
- 25) Cf. *A Defence of Poetry*, 140.

(おおた なおや 非常勤講師 英語)